



表情豊かだった頃の妻（2009年11月）



デイサービスで食事をとる妻（2009年1月）

愛するがゆえに
認知症の
妻を支えて14年



合同交流会「長谷川和夫先生を囲んで」（2009年）



豊田市介護家族会シンポジウム／左から3人目（2010年9月22日）

目次

はじめに 4

第一章 認知症の現状と将来 9

第二章 認知症と医療体制 15

第三章 よい介護はよいケアマネージャーから 19

第四章 病院、医院、医師との上手なつきあい方 22

第五章 よい介護をするには 26

第六章 今までの妻の症状はこのようだった 34

第七章 家の中で実行した事はなにか 39

第八章 知っておいて得する情報 42

第九章 こうすれば認知症は予防できる 49

第十章 失敗しない対応の基本 認知症の人の対応ガイドライン 52

第十一章 軽度認知障害と軽度認知症にみられる主な症状 54

第十二章 認知症の症状を見分けるポイント 56

第十三章 認知症のお薬 58

第十四章 認知症と深い関係のある糖尿病の対処 60

第十五章 家庭での介護く簡単な医学の基礎 63

第十六章 認知症の特徴 65

第十七章 認知症介護家族会への参加がなぜ必要なのか 69

第十八章 介護施設の上手な利用方法 74

第十九章 介護の川柳集 80

おわりに 82

はじめに

私は、妻が60歳の時に認知症を発症していることを知らずにいた愚かな人間です。そして現在、認知症の妻を支えて14年になります。何一つ認知症のことを知らなかった私がどのような方法にて今日までに至ったのでしょうか。

最大の変化は、自分自身のものの考え方が変わったこと。まず、認知症を始めとする主たる病気や、介護制度について勉強しました。そして、厳しい介護状況に苦しみ悩んでみえる人々の集まる家族会での交流にも、特に力を入れて取り組んで参りました。拙著ではそのような話をつづってみましたので、是非お読みいただき、参考にしていただければと願うところであります。

世間では「介護は大変でしょうね」「よく

やられますね、いい加減にしておかないとご主人が体をこわしますよ」「介護は60%がよいとか、どなた様もよく話されるではありませんか」といった声がよく聞かれます。たしかに介護は大変でしょう。しかし大変なだけに奥深いものがあって、逆になんとしてもやり抜きたい、真剣にやるべきだという気持ちで湧いて、日々努力をするのではないのでしょうか。そうして私も、ご支援くださった人々の良き指導にそってやり通したのです。

今や毎日のように認知症ということばを聞きますが、認知症という呼称が使われるようになったのは遠い話ではなく、2004年からのことです。それまでは痴呆と呼ぶ人が多かったのですが、物議をかもし、結局厚生労働省の働きかけで認知症と呼ぶようになったのであり、まだ11年しかたっていないのです。

このことは専門職の方もご存知でない人が多いようです。妻の発症は2001年の4月でしたので、当時は先生も認知症とは話されませんでした。「ご主人、奥様はアルツハイマー病です。10年ぐらいが目安ですし、今日からは家族の方がすべてのことに対し介助をしてあげてください。そして症状が日々進行していく病気です。初めのころは2年ぐらいの期間で進行して参りますが、病状が進むにつれその速度は早くなって参りますし、本人一人では日常の生活はできませんのでご承知

ください。残念ながら完治できる病気ではありません。お薬はあるのですが、治せる薬ではありません。只進行を遅らせることが目的なのです。脳の細胞が少しずつ死滅してゆく病気ですので、日常生活は一人ではまったくやれませんが、十分に注意をして下さい。

また本人一人での外出はむずかしいので、ご家族の方といっしょに出かけるようにして下さい」という、先生からのお話でありました。大きなショックでした。

当時は認知症について、TV、ラジオ、新聞、月刊誌、週刊誌などのメディアによる情報はまったくありませんでした。そのような時代であっただけに、私のように何一つ知らない人間は本当にどのようにすればよいのかと悩み、大きなショックと大きな不安で目の前が真っ暗になってしまったのです。

そんな私を助けて下さったのがケアマネージャーさんです。妻が60歳で発病してから65歳ごろまでの数年間は、私が無知ゆえになに一つ治療もしてやらずに放置していたのですが、それを助けてくださったのがケアマネージャーさんの適切かつ的確なる判断によるア